

Title	(海外報告)
Author(s)	増山, 和夫
Citation	デザイン理論. 21 P.116-P.118
Issue Date	1982-11
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/52565
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

(海外報告)

京都工芸繊維大学 増山和夫

このたび昭和57年度科学研究費補助金による海外学術調査（研究代表者・藤本康雄教授 京工織大・建築学科）「フランスを中心としたカロリング期建築遺構学術調査（第1次本調査）」に参加する機会を得て、フランス、イギリス、スペインの初期中世の教会建築を中心に平面形の実測と構成分析、各部軸線の方角と方位の測定などの調査・測量を行っています。当調査団は、建築史の研究者のほかに、美術史、彫刻、地球物理の研究者など6名によって構成されています。小生は、測量データの電算機による解析処理を担当するという事で参加しています。期間は昭和57年8月16日から11月1日までの78日間の予定です。

今ようやくその半を過ぎて、中部フランス、ノルマンディ、イギリス南部を終り、北スペイン、フランス東部を残すのみとなりました。

これまでに調査した教会の内、フランスでは、礼拝堂の天井裏をはじめ鐘楼の上まで登ることが出来た REIMS の教会、ステンドグラスが大変みごとな、CHARTRES の教会、柱頭彫刻がすばらしい ST. NECTAIRE、そして礼拝堂内部が朱色を中心に彩色された ISSOIRE の教会。イギリスでは、画家コンスタブルが盛んに写生をした SALISBURY の教会、今から1200年も前に建てられたという BRADFORD の小さな教会、それに CANTERBURY の大聖堂などが特に印象的でした。

調査地間の移動は主に自動車によります。フランスのパリを中心に四方八方にのびる高速自動車道（AUTOROUTE）の充実振りは大変見事だと思います。車線幅が広く、路面もよく整備されていると共に一般の交通標識のほか、行き

先案内、観光案内の標識などが絵文字によって大変わかり易く表示されています。道路両側の路肩の設計がいかにも大陸的で、十分な余裕を持ってなされています。自動車自体の性能もさることながら、道路環境の違いがこれほどスピード感や乗り心地に影響するものかと、今更ながら驚きました。名神高速では80km/hでも時として恐怖感が出るものですが、こちらでは100~120km/hで走っていても余裕を持てるし、1日往復500kmの自動車旅行もそれほど疲れが残りません。

イギリスでも何度か高速道路を走る機会がありましたが、やはり島国という感じは否めません。

フランスでもイギリスでも単車はほとんど凡てが日本製です。イギリスでは日本製の自動車も多く目につきます。ロンドンの目抜き通りで、日本の電気メーカーの商品が軒を連らねて並んでいるのも何かしら不思議な情景です。

ロンドンではデザインセンターにも立寄りました。イギリス各地のデザイン系大学の学生作品（卒業制作に相当する）の内から選ばれたものが展示されていました。テーマや作品の仕上り具合については、わが国におけるこの種のものと大差はありません。ただ違う所は、どの作品にもそのテーマに関連する企業や協会のスポンサーがついて、それぞれに賞金が贈られているということです。デザインセンターでは、82年度 CoID 選定商品の展示も同時に行われていました。どの製品もエンジニアリング的な要素がより多く評価されているような印象を受けました。

デザインセンター全体が以前に比べると展示場を縮少して、書籍や CoID 選定商品の売場を広げているのは少々気になるところです。

フランスがいかにも大陸的でおおらかさが感じられるのに対して、イギリスは、少々窮屈な感じのするのは煉瓦造りと白い目地によるばかりでなく、全く同じファサードしか持たない住宅にもあるようです。聞く所によると、一般の住宅でも、新築あるいは増改築に際しては、役所に設計図を提出して公開の上、広

い範囲の一般住民の了解を得なければならないとの事です。短期間の経験で早急な判断は許されませんが、何かにつけフランスとイギリスとでは対象的な感じがします。

これから行くスペインは、小生にとっては初めての経験です。どのようなことになるから今から楽しみです。

(1982年9月23日 パリ発信)